

# 開戦

群

青

## 残された時に

空襲

夕日に燃え上がる部屋 乾いた畳敷の小部屋 魚を見張る窓 閉め切られた  
薄い短いカーテン すべてこと七分袖のシャツの老人 一人 夢見続け  
た幼い日の少女とともに

晒される

虫でも鳥でも食ってくれ もう登りきれない 風の強い稜線 傾斜にしゃ  
がみこむ 薄曇りの高い空 寒さが刺さる 風の見届ける 目が最後を見つめ  
旋風が肉を運び去る 晒されていく骨 目が最後を見つめ  
る ああ、思いはすべて風に

落ち葉に埋もれ

七十五年の笑い声が黄金の落ち葉になつて 降りしきる 唾の尼僧が生き  
たのは七百年 銀杏の輝きが吹き込む洞窟 騒ぎ続けたおれ 魚の墓が林  
立している 魚たちが歩いてやってくる日だ 動かない目玉が階段を登つ  
ていく 青空には海にのしかかる意欲がない

背中を焼かれて

太陽の嘘が一気に暴かれた夏の昼のお話 意地悪なおひさまがガチヨウを  
丸焼きにして消えそうな月に食べさせるお話  
もうこれ以上残酷な地上を見たくないと 身を隠そうとして痩せてしまつ  
た月に 最後のごちそうだよと太陽が勧めたのは 身が溶けるほどに炙ら  
れたガチヨウの肉  
食べずに去つていこうとした月が聞いたのは「どうかお願い、表の皮のど  
こでもいいからちよつとだけでも食べてください」という悲しい声  
月のとんがり肉をつつくとあふれ出てきたのは焼けこがれた人間の群れ  
ピカドンが背中にやきついていっている 皮膚が溶け落ちた

節分の夜

閉め出された鬼たちに誘われ一緒に走る地の果て 鬼が走り込んだ洞穴は  
もう閉ざされていた 二月四日の太陽が登ってくる すべてのも果てから

生きていたのだ

芦は泥に撓みぬかるんだ土手の土に足をとられないように 母が洗つて  
くれたばかりの運動靴をつけた少女 川のそばに降り立つ

髪を伸ばしかけている 両手に青カエルを包み息をふきかけはなしかける  
口の先でカエルは飛ぼうとして少女の指に抑えられる 川は大きいから泳  
げないよ あとから田んぼに返してやるよ  
かあさんの生まれたところにはかじかというカエルがいるんだ  
それはそれは美しい声で鳴くんだそうよ おまえもやってみるか

炭鋳の

少女の糸切り歯と前歯が重なっていて声が低くはつきりとしていた  
し歌は苦手 父さんがものすごく上手いんだそう 踊りもね ずっと会っ  
てないけど 母さんは一日じゅう裁縫  
もう汗ばむほどの季節で少女は母手作りの木綿の袖なしのタンクトップの  
ようなものを着ていた ズボンに男の子のはく木綿のハーフパンツだった  
藤の花がぼた山に生え出して房をはじめて作ったんよ

それでも

しゃがみこんで川を見ていたその姿がたびたび目に浮かんでくるようにな  
った きつかけはおぼろげだが何となく分かっている  
少女はおれの傍にいた 傍にいて何もいわない 芦の葉をたたんで作  
った敷物の上 何にも言わない そのうち仰向けになつて雲の早い空を見  
る 目の端っこには立坑の残骸 カエルが脇に着地する あらつと少女の  
声がする おれは素早く坑道を降りる おれは走る 炭鋳夫たちよ

今

入念に沐浴をした　おれはひとりの老人になった　薄い血が排水溝に流れていった  
あと少しの時がある　やつと　だれかれとなく話している　だれかれとなく肩を抱き合っている  
おれの名前を脱いだ　少女が笑った　こつちへと案内してくれる

墓石を押し上げる  
胸をはり目を輝かして出ていった　埃だらけの部屋には甲高い声やふくれあがる熱気が渦巻いた　今日きつと決着をつける　みんなもそう思っている　キヤップランプの一団　百年を経て今が来た　たぎっている　終わらない　地下から出る　おれも

たたかいだ  
深い悲しみが育てた　土のあらゆるところに埋まっただけで消えることはなかつた　悲しみ　身が軽々と弾む　なんて自由なんだ　熱い思い　老人が叫ぶ　少女を乗せて老いた狼が吠える　若ものの声が嵐となる

つぎへ  
夕焼けよりも赤い　血よりも重々しい炎が立ち上がる　内から人々を燃やす　みなぎる水　あちこちで新芽がふく  
部屋は燃え尽きた

## 戦場

錦糸だか

麻糸だか

化学線維だか

世界が

360度の曼荼羅だ

やっと峠にたどり着いた

あとからやつてくる時間や立ち塞がる時間や渦巻く今の時間やらがぶつか

り  
きしみ重なるかと思うとたちまち引いていく

海が大河の流れを押し返す

海岸は歩兵戦の真つただ中だ

曇り空のかなたで星と闇が果てしもなく諍っている

空は真空ばかりになり

肺がはちきれ

重力の揺れがやまない

被曝の峠に立ったのだ

見渡す限りのあらゆるものが  
分けられていく峠なのだった

緩んだ太鼓の地鳴りに乗った神の鳥が  
せんたくく、せんたくくと喚いてとびまわっている  
めった打ちにされた実験場の海が怒りの総毛を逆立てる  
虹色の筋肉状のロケットの群れが雲の中から降り注ぐようとしている

生き残ろうとして休みなく血を飲み続ける強欲者  
優しさしか知らない歌い手は高圧線の高みに追いやられ歌い続けるために  
感電する

いのちが色とりどりに塗り分けられている

働き場や町や港が

無言の時間に絞めあげられ

叫ぶこともできない

生き返った巨大墳墓が重量戦車のキヤタピラをつけ

砲塔を回転させてやってくる

煙と瓦礫が熱い雨を降らす

ああ

薄藍色の仕事着の

橙色の作業帽の

労働者たちはどこに行ったのだ

春キャベツの葉を剥いでいた農夫たちはどこに行った

殺されたひとびとと殺していく兵士たちばかりが見える

黒い腕カバーをして片目で時計の腹を覗く職人は  
どこに行った

レジスターの音も聞こえない

満員バスも走らない

桃色のイヤホンからは音は流れない

笑い合う学生たちもいない

手押し車にすがる老人たちもいない

初めて土を踏みしめる幼い足も見ることが出来ない

みんなどこにいったんだ

人っ子一人いなくなつた

出てきてくれ

きつとほら

ぼくらしか知らない窪みや物陰や

工場の倉庫に

隠れているんだ

ぼくは菅原克己の詩をそらで歌う

『そびえるマスト』

軍艦山城の乗組員が  
艦内細胞をつくる。  
その機関紙は「そびえるマスト」

(『』は菅原克己著 詩集「日の底」より)



## 六月

夕食に戻っている姉、妹、弟、祖父母  
母がいる

父はどこだ

あなたたちは本当にぼくの家族なの  
六月のぬかるみに写っている影じゃないの  
空にも水があふれている  
びしょ濡れになった爆音が止まない

きつともう会うことはないんだ

みんなは記憶のかから  
みんなは時間の土をかぶせられ

葬られた

なんども誓ったのにみんなは

今かぎりの

それももう幻のようだ

腐った板壁に挟まれた路地のむこうに  
行つてしまつた

戦争が終わりなく続いて  
街には表情のない雨が降っている  
ジェット機が燃料タンクをラグビーボールのように落とす  
港の機関車が唸り続ける  
おとなたちは黙っている  
子供たちも黙っている  
みんな目を見開いている

食事をしている  
これが最後だと思う  
今夜のことも明日のあさのこと  
も  
ただっ広い滑走路の先っぽの  
霧のなか  
重い布団が揺れ落ちる夢のなか